## 連携・つながりの力

動物園運営には前述の支援、応援が大きな力になってきましたが、これとは別に企業等とのつながりも力になっています。

一つは動物園の歴史とともに歩んだ園内遊園地（運営企業）との連携です。遊園地は大森山公園建設と深い関わりがあり、現在の大森山公園は以前、地元住民の田畑でした。秋田市は公園と動物園の建設用地として土地を譲り受けましたが、一部の人たちは観光会社を立ち上げ、開園後に園内にレストランや遊園地営業を始めました。以後、動物園と遊園地は一体となり大森山の顔としてともに賑わいづくりを担い、レクリエーションの場を提供してきました。ところが2007年に諸事情で遊園地は営業を終了、秋田では大きな話題になると同時に閉鎖の影響も心配されました。幸いにも大阪の遊具設計企画会社が事業を継続し、現在の「大森山ゆうえんちアニパ」として営業を再開してくださいました。老朽化した遊具の再整備に加え、新機種導入、さらには動物園50周年の節目に観覧車の更新もしてくださり、大いに話題なりました。遊園地は動物園とともに子どもの夢を育む大事な場として存在しています。

アニパの新観覧車「フルール」

もう一つのつながりは、東北の日本海側にある鶴岡市立加茂水族館、秋田市大森山動物園、男鹿水族館GAOが連携し利用者の流れをつくりだそうという試みです。3園館が力を合わせて宣伝し、大きなカタマリとなり利用者を呼び込むことを目標に2013年から連携が始まりました。

3園館連携のポスター

3園館連携協定書への署名式

各園館の代表動物を登場させ、「クラゲ・イヌワシ・シロクマライン」と名付けスタンプラリーなどを実施してきました。異なる経営主体の連携、協力体制は簡単ではありませんが、今後の発展が楽しみです。

少し変わった連携で課題解決をした例もご紹介します。動物園の課題の一つに動物の排泄物処理があります。量の多い草食動物は処理に大きなコストが必要になり、下水等での処理が難しいものです。そこで畑への有効活用を目指し本格的に堆肥化を検討しましたが、動物園の力だけでは難しく秋田県立農業短期大学（現県立大学）に相談し、様々な方策を検討した結果、有機物の発酵分解力の強いバクト菌が有効と分かり、堆肥事業を実施する会社と共同開発し、完成した堆肥を「ゾウさん堆肥」と名付けました。2012年頃「ゾウさん堆肥」は商品化され、現在は販路も定着し、一部のJAや農家、有機農法で米をつくる団体、多くの家庭菜園で利用されています。

ゾウさん堆肥

また、企業等からの企画提案事業では、動物園の人気動物と50周年のロゴをプリントしたトラックを運行してくださる企業も登場しました。

動物園は様々な連携と関わりを大事にしながら動物園づくりを進めてきました。

3園館連携10周年を記念して、地元小学校へ出前授業を行いました（左から、インコの解説、ヒトデとふれあい、クラゲを観察）

動物たちがプリントされたトラック